

クルミ味のストロガノフ

佐々木優美子（東京都足立区）

私にとって父は、疎ましい存在であった。

父と遊んだとか、甘えた記憶がほとんどない。父は仕事もせず、酒ばかり飲んでた。母が働いて得た金を賭け事に使い、咎めれば暴力を振るった。病気で倒れて半身不随となっても、暴君のままだった。

こんな生い立ちなので、家族の楽しい思い出は少ない。私達は、いつ理不尽に荒れるかわからない父に怯えながら、暮らしてきた。私は父が嫌で、高校を卒業すると逃げるように家を出た。結婚して姓が変わった時は、解放感でいっぱいだった。

結婚した翌年の事。新戚の結婚式に招かれ、父が岩手から上京した。親戚の家に泊まる予定だったが、居心地が悪かったらしい。どこか宿を探すようにと、突然私に連絡してきた。

「安い宿は嫌だ。東京で、一番いいホテルに泊まりたい」等と言い、予算を聞けば「幾らでも構わない」とうそぶくが、父にそんな大金があるはずがない。

やっと空室が見つかったのは、新宿のホテルだった。素泊まりで一泊二万円と聞いても、「そこでもいい」と、父は虚勢を張った。

翌朝、新幹線で帰る父を見送るために、ホテルへ行った。「お部屋はどうだったの？ よく眠れた？」と聞くと、ぶっきらぼうに「眠れた」と言うだけだった。きつと、分不相応なホテルに泊まった事を後悔しているのだろう。これ以上機嫌が悪くならないうちに、新幹線に乗せなければ。そう思っていると、「腹が減った。このホテルで何か飯を食ってから帰る」と言った。「レストランも高そうだよ。それに、お父さんが食べられるものはないと思うよ」

父は偏食で、普段から洋風の料理を食べなかった。それでも言い出したら聞かない人なので、仕方なくレストランに入った。私もホテルで食事などした事がないので、横文字のメニューを見て飛び上がりそうになった。

「何でもいいから、二人分頼め」

そう言われても、父の好みも知らない。父は右半身が不自由なので、ナイフを使わずにスプーンで食べられそうなビーフ・ストロガノフをふたつ頼んだ。それはメニューの中では一番安かったが、三千円近くもした。

真っ白なテーブルクロスにナフキン、輝く銀のスプーン。恭しい手つきのウェイター。私の胸の鼓動が高鳴っていた。それは高級なレストランに緊張しているのか、怖い父と二人でいるせいなのかわからない。ストロガノフは、すぐに運ばれてきた。

カレーやハヤシライスのようなものを想像していたが、まるで違っていた。細切りの牛肉はクリーム色のソースと絡まり、バターライスが添えられた、美しいひと皿であった。

父が食べ始めたので、私もひと口食べて思わず目を見張った。これまでの人生で一等美味しい料理だった。牛肉は驚くほど柔らかく、ソースはまるやかで深みのある味がした。

父は黙々と食べていた。もし口に合わない上に高いたきたら、どんな暴言を吐くかわからないので安堵した。

「私、こんなに美味しいものは生まれて初めて。美味しいよね？」そう聞くと、父は無表情で

「クルミ味がする」とだけ言った。クルミ？ クルミなど入っているかしら？ 隠し味が何かだろうか。私は訝しく思いながらも、黙っていた。

父は、ストロガノフをきれいに平らげた。余程気に入ったのだろう。私も急いで全部食べた。会計は、税とサービス料も加算され再び飛び上がりそうになったが、父が支払いをした。

三十年も前の出来事である。あのホテルはいつの間にか別のホテルになってしまった。父はもう二度と、東京に来る事はない。今は寝たきりで、岩手の病院にいたのだから。私達は、たわいない会話さえも足りない親子であった。

「クルミ味がする」

それは、父の田舎の方言で「とても美味しい」という最大級の褒め言葉だと知ったのは、ずっと後になつてからだった。

父は、あのストロガノフの味を今も覚えているだろうか。今度見舞いに行った時、聞いてみようと思う。父と、まだ会話が出来るうちに。